

めだか談義

メダカ発世の中つれづれの記 2019・9・26

皆さん「福袋」というのを買った経験がありますか？この10年ほどはお正月の目玉商品としては百貨店ではなくてはならないアイテムということなのですが。まあ、損得を考えれば損はしない。1万円の福袋にはそれ以上のモノが詰められているし、運がよければ10万円に近いモノに出くわすことだってある。でも何が入っているかは不明のまま1万円を出費するわけで、これはもう運試し以外の何物でもない。なかには運試しのハシゴで百貨店を渡り歩くという猛者もいるときくと、世も末だと思うほかありません。なぜ売れるか、というと、「買うものがないから」「欲しいものが見つからないから」「でも買い物はしたい」と論破したのは、広告評論家の天野祐吉さん。その著「成長から成熟へ」（さよなら経済大国）は私の座右の書ですが、日本のGDPは右肩上がりでも緩やかだが上昇する一方、生活満足度は右肩下がりで、モノは充分なのにココロは満たされることはなく、むしろ不安ばかりが増していると指摘しています。国民生活白書の示すデータでも証明されているのだそうです。

「福袋」はその歪みの象徴ではないかなあ、と天野さんは言います。9月11日、鬼柳の開発地区に足を踏み入れた時、その天野さんが抱いていた疑問が私にも分かるような気がしたのです。開発工事が本格化するまえにメダカを救出しようとの声に賛同して早めに現地に入りました。同じように早くに駆けつけた神谷さんと二人、その開発地区の真ん中で参加者の集合するのを待つことになったわけですが、まず茫然たる思いでした。一面のはずだった田んぼはとうに放置され荒れ果てているなかで、1本の水路だけが何も関係がないように生き続けているのです。造成工事が始まれば、この20ヘクタールといわれる農地が、そしてこの水路がやがて埋められ、コンクリート化、アスファルト化され、土が消える。もちろん、生き物はすべて消えていき、生態系は消滅する。神奈川県自然保護協会が選定した「生態系ホットスポット」のひとつ「酒匂川左岸の野生メダカが生息する桑原・鬼柳」のメダカ生息エリアの何十パーセントが失われることになる現実を痛感しながら、その日、網を使い、膝まで水路に入りながら、生き物たちを出来るだけ多く助けてあげようと必死でした。メダカ、タモロコ、オイカワ、サワガニ、ドジョウ、ふだんは目の敵のアメリカザリガニさえ、ここでは生態系の一員でなにやら愛おしく。

ああ、このようなことが何十年も繰り返されてメダカは絶滅危惧種になっていったのか、という思いでした。市の都市計画課では、ここに工業団地が生まれ企業誘致ができれば、雇用促進、定住促進にも繋がる」と言い、事業者は「優良企業を誘致すれば、市の活力ともなる」ともメディア等で述べています。工業団地とうたう以上、工業化製品が生産され、そして流通されて市場を賑わすことにはなるのでしょうか、いまのところ複数の企業から問い合わせがあるとのことだけで、どんな景観になってしまうのか、まして、いったい何年かかることになるのか見当もつきません。モノではなく、コトに消費の中心が移る時代となっているいま、老婆心ながら、事業者の思惑どおりに進展をしていくのか見張っていききたいものです。経済を活性化させることはとてもたいせつなことではありますが、小田原の皆さんにとっての「幸福」「充足」はいったいどこにあるのだろうか、ということ、それを考えないと。大量生産、大量流通、大量消費などの大都市型モノサシではない、「福袋」に群がるようなおかしい世相を生み出さない、小田原だけの「幸福度指数」みたいなものを発見したいものです。メダカはそのことを気づかせてくれると思うのですが、どうでしょうか。何も知らないメダカにそんな重荷を背負わせるのは忍びないですね。工業生産されるモノはもういない、そう思うのは高齢者の冷や水なのではないでしょうか。

小田原に「都市化」は本当に必要なのだろうか。